

<b>社会科</b> <b>6年A組</b>	<b>わたしたちの願いと政治のはたらき</b> <b>～現在の陸奥宗光になろう～</b>	<b>梶本 久子</b>
---------------------------	---	--------------

## 1. 単元について

本単元は、学習指導要領第6学年の目標(2)に基づいて設定したものである。中でも、政治は国民生活の安定と向上を図るために大切な働きをしていることについて考える。6年生にとって、政治の働きや考え方について理解するためには、具体的な事実をもとにして捉えていくことが大切である。身近な「ふるさと和歌山」の現状や課題を追究していく中で、地域課題を解決していこう、自らもよりよいまちづくりに関わろうという当事者意識をもって取り組むことができる。その中でも「県の持続可能な観光の取り組み」について興味関心をもっている子どもが多いため、県の観光の課題を明確化し「ふるさと自慢」だけでない学習を進めていきたい。観光を通した学びはその地域の特性を深く考える習慣を養うことにつながり、愛着はもとより、地域の持続的な利用を考えようとする姿勢を育てる。そして、持続可能なまちづくりの担い手として、地域素材の活用や生の声を聞き取る活動を大切に、自分の考えをより深められるようにしたい。

## 2. 単元設定の理由

### (1) 本実践の主張点

- ・持続可能なまちづくりの担い手として地域の将来を考えることにより、当事者意識をもち、問い続ける子が育つであろう。
- ・『観光振興アクション6Aプログラム』を行政や地域に発信することを見通した授業デザインにすることで、多角的・発展的な思考を育てることができるであろう。

### (2) 教科提案とのかかわり

社会科部では「よりよい社会の形成に参画する子ども」を育てるために、6つの要件が必要だと考えている。中でも、地域課題の教材化・出会いと学習の見通し・地域への働きかけを中心に述べる。

#### ① 地域社会の課題を教材化する～ふるさと和歌山に学び、和歌山を愛する個に～

地域社会の課題で学ぶということは、教材との出会いを地域から見つけ出し、地域の「ひと・もの・こと」とのふれあいの中で社会的事象を考えるきっかけをもたせることである。これからの社会は市民がこれまで以上に主体的に参画することが求められている。そのためには、地域との主体的な関わりをもとうとする子どもを育てることが必要である。そこで、関わりの中で見出したよさを実感し、地域との主体的な関わりをもとうとする子ども、すなわち地域を愛する個を育てたいと考えている。そして、学習内容を効果的に理解させるために、今年度より新しくなった「和歌山県長期総合計画」を作った課の方から現状や課題を聴き、興味関心を喚起し、本単元をスタートした。改変の「今」を大切に「持続可能な未来のまちづくり」を提案していくことをめざす。

#### ② 出会いと学習の見通し ～プロジェクト型学習を組織する～

子どもたちのおかれている生活に公民をつないで考えることは大切なことである。それだけに、子どもが主体的に学んだことを活用し、意思決定し自分ならどう行動するのかを考える実践にしたい。そのためには一人一人が問題を見つけ、これまでの生活体験や学習、知識・技能を活用する。そして子どもたちが問い続け、追究し続けていくプロセスの中で、新たな視点や社会認識を獲得したり、深めたりしていく。この学びが、生活と公民の学びをつなぐことであり、未来の生きて働く力を養い、それが社会参画力となると考える。

そのためにも、教科内容をふまえ、新たな社会的事象を教材化し、子どもたちが主体的に価値判断をする力がつくような授業デザイン（プロジェクト型学習）をしていかなければならない。今年度は1年を通して「ふるさと和歌山再発見プロジェクト」というプロジェクト型の学習を行う。常に「和歌山」のことを意識しながら、社会科だけにとどまらない横断的な学習で、和歌山から日本の歴史、政治について学んでいく。

そして、年間を通し、地域の多くの教材やこだわりをもった方と出合わせ、学んだことを発信していくことで、子どもが社会認識を確かにし、意欲的に追究することができるのではないかと考えている。社会科では立場や考え、価値観の違いの中から多角的な視点がうまれていく。そのために本単元だけでなく、どの単元でも、自分の考えを表出させ、他者との対話や関わりの中から事実認識や価値判断の違いを認識する場を設定している。単元と単元の学びをつなぐためには、複数の単元を貫く「意思決定」「選択」とい

う主題を設定して単元間の学びをつないでいきたい。

### ③ 地域への働きかけ ～使命感で当事者意識をもたせる～

本単元では、当事者意識をもたせるために、住みよい和歌山県の提案をするということを組みこんでいる。未来の主権者、現在の主権者として、その自己認識を育てることは重要である。そして、住んでいる地域社会の一員であるという認識をもつことで、子ども目線での「まちづくり」に参加することも可能である。これらは、指導要領の「内容の取扱い」(2)ウの「地域の開発」の事例として位置づけられる。また、新指導要領ではさらに「地域の開発や活性化」として取り上げられている。本校と県庁は数百mの距離である。計画に調査活動を位置づけることが容易であり、行政の方々との聞き取り調査を活用して「政治の働きや考え方」の理解を図ることができる。本単元でも地域の人とともに学びを深め、子どもたちが多くの人に伝えたいという思いを大切にしたい。授業中だけで社会認識を定着させるだけでなく、子どもが「使命感」をもって対話やインタビューしていくことにより、それぞれの文脈でストーリーを主体的につくっていくであろう。現実の公的社会問題に直面するような場面で転移できる学力にするためにも、当事者意識をもたせる仕掛けが必要であると考えている。

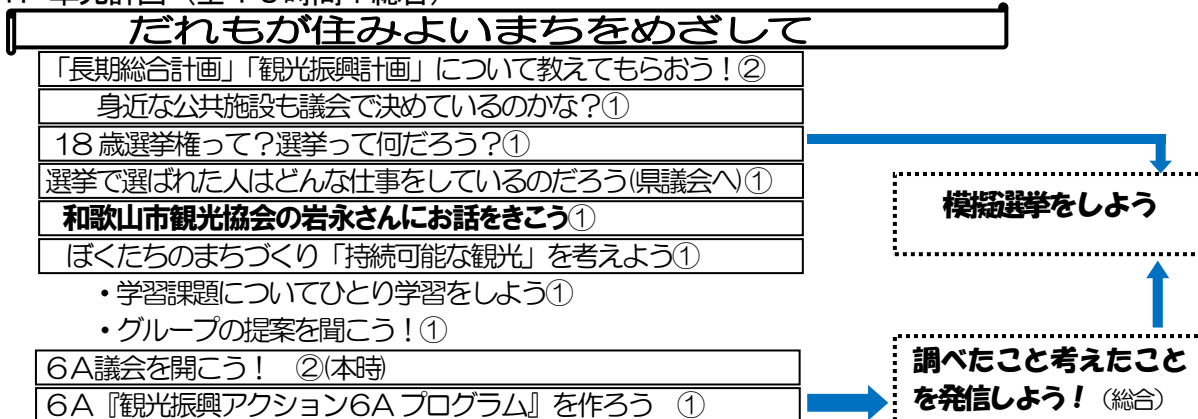
#### (3) 問い続け、学び続ける子どもたちをめざすために

問い続けるとは、社会に生きることであり、自分なりの意見や考えをもち、価値判断しどのような解決策があるかを考え、表現しながら社会への参画を模索していくことである。自分の考えを発信することにより、考えを明確にすることができる。そして、友だちと相互に刺激し合う中で、自分の考えを修正したり、深化・発展させたりしながら、共通点や相違点を探し、問題の共有化ができる。そういった子どもたちの学びの軌跡である見えるものを手がかりに見えないものにも気づき問うていく姿が学び続ける姿であろう。よりよい社会や持続可能なまちづくりの実現のために学習が終わってからでも、学び続け、考え続ける子どもたちの姿としてこれまで以上に目指していきたい。

### 3. 単元目標

- ・地方公共団体の働きや議会・行政・国の支援・住民の関係や政治の役割、政策決定のプロセスについて、調査したり資料を活用したりして調べ、政治の働きを理解する。(社会認識)
- ・他者の意見等を通じて、政策についての自らの考えをもち、判断を行うことができる(公正な判断力)
- ・一人一人が主権者としての自覚をもち、進んでまちづくりに参加しようとする態度を身につけることができる。(社会と関わる力)

### 4. 単元計画(全13時間+総合)



### 5. 本時について

本時では、グループの中から出た和歌山県のインバウンド観光の提案について話し合いたい。一人一人が自分の考えや願いの根拠をもち、今までの学習を振り返りながら授業に臨むことで、自信をもって発言するだろう。子どもたちが問題に対していろんな角度から考え、意見交換する中で、多くの方から得た断片的な知識を概念的・統括的な知識に高めるための練り合いの場になればいいと思っている。今まさに、まちづくりに関わる方々と出会い交流する中で、和歌山県の現状の厳しさを受け止め、未来のまちづくりに向かって熱心に追究している。そして、そのまちづくりの提案を行政や地域に発信するため、「使命感」に駆られている29人の子どもたち。本気になって「和歌山県の未来のまちづくりや観光に対する思いは誰にも負けない」と話している。その熱意あふれる話し合いを見ていただきたい。